

へのもどり方が終わりのない問題としてあるかぎり、彼等の「個人」と「集団」の思想を検討することは、現代に続くこの問題を考察する上での指標となるはずである。とりわけ南原を除く三者は先行研究も少なく彼等の思想的内実を論じたものは殆ど見あたらない。この意味でも現代社会の原初的な機構を策定した彼等の思想を考察することは、戦後史に対する予備考察の意義も有するものである。

序章 二〇世紀初頭の旧制第一高等学校における「個人」の特質

本章では、この時代の一高に在籍することの意義を明らかにするため、まずは一高に在籍していた魚住影雄（一八八三～一九一〇）とそうではなかった石川啄木（一八八六～一九一〇）を比較し、彼等の見ていた視点の差から一高生特有の価値観の抽出を行った。そして次にその価値観が出来上がる根拠として、当時一高で大きな問題としてあった校風論争を考察し彼等の思想的特徴を把握した。そして一高校長となった新渡戸稲造が与えた宗教的涵養について分析し、彼等の「宗教」に対する個性的な理解を明らかにしたのである。

二〇世紀初頭からマルクス主義の流行の間に、一高において、とりわけ「個人主義」的風潮に影響を受けて思想形成をした人々は、「国家」や伝統的な価値から切り離されたなかで、自己同一性を獲得しなければならなかった。一高で形成された「国家」に対する認識は、単に「国家」を敵対概念として挙げうる魚住の感覚と、その「国家」が自分ではどうすることも出来ないほど生活の隅々まで浸食しているものとして理解する石川との違いで理解できるように、同時代においても一高にいる人物と一高以外の人物との間で隔絶したものとしてあった。

そして校風論争において「個人主義」の側で主導的役割を果たした人々は、敵対した「籠城主義」との対決の中で、「集団」の集合論理となりうる超越的価値を見出すことによって自らの位置を規定するのではなく、あくまで「個人」の理性と経験に基づいた価値を足がかりに自身の思考探求を進め、既存の社会を理解していく思惟様式を手に入れていくことになったのである。

また、「国家」や「家」という価値を相対化し、自前の自己同一性を創造しなければならなかった一高の「個人主義」的學生たちを救済するはずの超越的価値である「宗教」も、「個人」における道徳的規範を担保する以上の意味は持っていなかった。このことは、先行研究で指摘される明治初期の、「国家的価値」と自身の宗教的超越性との間で厳しい倫理的葛藤を経て、自己同一性を獲得していった内村鑑三らの世代とは、明らかに異なった形で「宗教」的超越性を獲得していたことを示している。彼等は、既に客体化された「国家」しかもっておらず、その中で容易に「宗教」的超越性を獲得していった。

二〇世紀初頭の一高における「個人主義」的風潮のなかで思想形成をすることとは、「国家」への同一性を作り出す権威や、包括的な世界観としての宗教思想からも離れたところで、「個人」のあり方を探さなければならなかったということだったのである。

第二章 安倍能成の「個人主義」

第二章では、「個人主義」「人格主義」的思想をもつ人として規定されてきた安倍の「個人」のあり方に注目して、思想形成期から安倍の自己同一性のあり方を考察した。

安倍は、一高時代に、同級生であった藤村操（一八八六～一九〇三）の死や校風論争、「自然主義」文学論争などの、新しい価値を模索する若い世代の自己同一性をめぐる象徴的な事件と関わっていた。そのためまずは、高校卒業時から大学までの間で、安倍が自己同一性を獲得していく過程を分析した。

校風論争時の安倍は、「個人主義」を標榜する一群の人々と行動を共にしていたが、その視点は、単に思想上の相違のみで「他者」を規定するのではなく、同時にその「他者」の人間的営みにまで及ぶも

のであった。安倍は、論争の過程のなかで、対立しながらも敵対勢力の人間を、自分と同じ「集団」の一員として認め、その上で「集団」のありようを描こうとする「他者」認識を確立していったのである。

さらに安倍は高校から大学時代にわたる綱島梁川との交流によって、「自己の要求」を持ち続けながらそれがそのまま「道徳的」であるような境地をめざして、自己超越の為の論理を模索し続けた。しかし、超越的な存在を把握することの出来ない安倍は、懐疑主義的な立場にまで自己を相対化するに至る。

そのような安倍の世界観に積極的な意義を与えたのが、哲学的知見であった。ケーベルによって示唆されたルドルフ・オイケンの「新理想主義哲学」に傾倒することで、安倍の内省的な問題は満たされてゆくことになる。

オイケンの、「個人が個人の内面を統一」し「我等の本質の自覚とその本質の上への生活の建設」という実際の生活上における「理想主義」的なあり方とカントの道徳哲学によって、安倍の思想的立場は完成することになる。安倍のパースペクティブが「人間」そのものから発し、「個人」の持つ道徳的行為が、あくまで「個人」の問題として析出されるのは、「個人主義」を徹底し、「他者」との間に究極の意味で共通認識が得られないことに気づいているからである。そうである以上、安倍という「個人」に必然的に要請されたのは、カントの「道徳的」あり方を、オイケンの如く「理想主義」的態度で日々為し続ける、という態度であった。安倍は「集団」に対しては、カントに依拠した絶対的な善を「遙か彼方に望む」という「理想主義」的態度によって、相対的価値でしかない現実社会に対して、批判的に接してゆく。

そして安倍の提示した「集団」のあり方とは、単に「他者」との差異性を捨象して想定されるコスモポリタンなものではなく、現実社会における「個人」のあり方を漸進的に見つめながらの、インターインディビジュアルな結合であったといえる。これこそが、安倍に、政治的、宗教的な権威より離れた地点から物事を捉える視点を終始一貫して持ち続けさせたものであり、安倍の特殊なあり方であると言えるだろう。

第三章 天野貞祐の規範意識

第三章は、これまで戦後政治史に関わる議論の中で保守的な政治体制に迎合した人物としてステレオタイプ的に捉えられてきた天野貞祐を、その規範意識のあり方を内在的に理解することで再評価する試みである。

思想形成期に天野が影響を受けた人物は、内村鑑三（一八六一～一九三〇）であった。天野が内村に見出したのは、絶対的存在に帰依し奉仕する「宗教者」の態度であり、「信仰」自体ではない。絶対的なものを希求するという本源的な渴望がありながら「信仰」に至らない天野は、内村の信念を体現し実践してゆく態度そのものに影響を受けたのである。

天野のカント理解は、「神」の存在を宗教的には一旦保留して人間の理性的活動のみを信じる態度としてあらわれる。天野の規範意識とは、個々人の知識がそれぞれに集成したものであり、一般的に存在するものではない。それは、個人毎に異なる道徳的判断はあり得るし、それぞれに価値を認めるものという一見相対的なものである。

天野は、真理としてすでに存在するはずである「道徳」や「道理」を、人間それぞれが主体的に見いだしていくという哲学的立場を、いわば「信仰」ともいえる態度によって堅守し、実践してきた。天野の規範意識の根底にあるのは、「個人」を中心とした価値を信頼する態度である。それは「社会」や「国家」という集団を論じる際に、かならず「個人」の人格、存在の主体性を基本として議論を出発させる傾向をもたらし、かつその「個人」によって形成される「社会」や「国家」の倫理的あり方に関しても

具体的イメージを持つことが出来たのである。このことによって天野は、政治的な時代変遷に関わらず、「道理」という規範意識を提示し続けることが可能であったといえるだろう。戦後の道徳論も、この天野の規範意識を踏まえることで理解することが可能である。

第四章 田中耕太郎の改宗——内村との訣別と「他者」へのまなざし

これまで先行研究は、田中の独自性、特殊性を見出してはきたが、一方その論旨としては、カトリック—非カトリックという二項対立的な議論に決着してしまい、非カトリックである内村との訣別という出来事も、田中のカトリック的側面の為す所として説明される以上の意義を求められなかった。いいかえれば、「カトリック的なもの」が議論の底流を為しているが故に、宗派論の枠組みを超えた視点が生まれ得なかった。第四章の目的は、田中の思想形成期の分水嶺ともいべき、内村との訣別という一連の経緯を、田中の思想の変容という視点から考察し、その内実を問うことにある。

田中は、「道徳的修養の類型」、すなわち個人が欲望や罪惡にとらわれないための道徳的規制力を、「信仰」に求めていたのである。これに対して、「神」によって相對觀念を手に入れていた内村にとって、それへの私心のない服従こそ「信仰」であり、その觀念そのものを吟味する余地はない。田中は聖書解釈をする個人同士が相容れなくなるという事態を経て、「個人」の限界を悟ることになった。田中の視点に、異なる主張をする「他者」が映ったとき、それぞれを止揚する客観的論理が必要であると田中は考えだすようになる。カトリックに入信した田中が主張してゆくのは「他者」との共存の原理であった。この秩序維持の思想こそ、田中の特質であると考えられる。

しかし一方で「他者」という点にのみに目を向ければ、この秩序維持の思想は、単に田中の個人的傾向性に帰すべき問題ではない。明治から大正へと移り変わった時代の表象として、田中の「他者」という視点は捉えられる。「国家」と「個人」の二元的な視点からだけでは捉えきれない「社会」の問題が立ちあらわれる大正という時代において、田中は「社会」を構成する「他者」からなる「集団」の存在に積極的に目を向けるようになる。いわば田中は、大正期における、身近な「社会」に対して積極的にコミットするという時代の風潮と、歩調を合わせた人物とも捉えられるのである。それは、改宗以前から執筆を開始し、改宗以後に出版される『世界法の理論』（一九三二年）においてあらわされた。田中は、自然法をすべての法の基礎とする法学者としての視点から、多層的な社会認識によって、個別社会における「法」の制定と「世界法」の可能性について論じた。「他者」との共存の原理を「法」に置き換えた田中は、それぞれの社会共同体において顕現する「道徳」的な「Communityの感情」を念頭に、「法」を構想している。

以後、大学や政府の中で、積極的に秩序維持を志向する田中の事績を鑑みれば、内村との訣別は、田中に、個人が個人のありようだけを考えるのではなく、いかに「他者」、あるいは「集団」において協調し、共存することができるのかという問いを、自覚的に考えるきっかけを与えたものと考えられるのである。

第五章 南原繁における「個人」意識——その思想形成と時代

これまでの先行研究によって、南原の「共同体」論と、またそこに至るまでの過程を担う「個人」とはいかなるものであるかという問題は、理解可能であるように思われる。しかし、南原の内在的な理解として、いかに「集合」の論理が形成され、そしてそれを担う「個人」の具体的なあり方がいかに形成されたのかという疑問は、いまだに回答を得ていないように考えられる。そこで第五章は、南原の思想形成期から思想傾向を分析し、それを「プロテスタンティズムとカトリシズム」論争、また平賀肅学にお

ける発言と行動と照らし合わせることで、南原の「個人」と「集団」の論理を導き出すことを目的とする。

南原の「集団」の論理とは、具体的秩序を求める方向ではあられない。それは何時も「他者」の道徳律を尊重し、またその社会的共同体の目指すべき最終的な神の「正義」に沿うか否かの南原「個人」の価値判断によって、批判的な形であられるのみである。それはそのまま、「家」や中学といった郷里の「共同体」との不断の関係によって思想形成をしていった南原の思惟様式をあらわしている。

南原は、「家」にまつわる価値からの転向をした時点でも、具体的な関係性のなかで決定的な断絶をしていない。郷里の「共同体」や信仰の「共同体」のいずれからも断絶することなく、「個人」それぞれの価値を、その「場」それぞれのあり方において認めることのできる態度をとり続けたのである。このことは、特徴的な「宗教」感覚に反映されている。南原には「他者」との親密なコミュニケーションによって、いつでも「共同体」に参加しうることが信じられたのである。加藤節の指摘した、南原と異なる「形而上学的なドグマ、あるいは主観的な信念として否定する人々の反論にどこまで耐えうるか」という疑問は、決定的に異なる「他者」を見出さなかった南原の思惟様式にとって、何時までもつきまとうものであろう。しかし、このことは逆説的に、普遍的な超越的価値を遙かに望みつつ原理的な正しさをいつでも議論の端緒とする「純粹」さの証明でもある。南原の視野は、「個人」を中心にし、そこから「共同体」、「民族」「国家」「世界」へと同心円状に広がっている。どの「場」にあっても「文化の世界から超越して、個人的心情の内面に沈潜し、個人的心情と確信において」決断する「個人」の価値は変わらないのである。田中のように、ある「共同体」の秩序のために、そこに不適合だとして排除されるような「個人」は存在しない。南原は「個人」のあり方として異なる人間があったとしても、批判にとどまり排除することは無いのであった。

結論

本博士論文では、二〇世紀初頭に一高で思想形成をした人物、とりわけ、先天的な「集団」の枠組みを出来るだけ排除し「個人」のあり方を内省的な葛藤の中で見出そうとした人物達の、「個人」と「集団」に関する思想を考察した。安倍能成、天野貞祐、田中耕太郎、南原繁は、「国家」を相対化しつつ、当時学術的にも現実の社会運動によっても注目されるようになる「社会」という多層的な世界観を与えられて、それぞれ独自の思想を形成させていった。戦後の「日本」の再生を目指す政治的風潮の中で、「大正教養派」や「戦後保守主義」という言葉によって隠されてきた思想の内実は、いうまでもなく、多様なものであった。

彼等に共通するのは、普遍的な存在としての「人間」のあり方を求めたことである。そして、それぞれの章で見てきたような各々の「個人」のあり方から、いかに「集団」を捉えていくのかという視点を設定するとき、彼等の「個人」に与える価値と、「集団」に与える価値とは一様のもではなくなる。つまり、それぞれの自身の経験に裏打ちされた「個人」とはかくあるべきという価値観が、いつもそのまま「集団」へ適応させようとは限らなかったのである。

彼等の思想的傾向を大まかに整理すれば、二つの軸で考えることが可能である。一つは宗教的超越性を保持しているのかという軸と、もう一つは「個人」と「集団」に対していずれに価値を置くのかという軸である。田中は、内村との「信仰」上の意見の相違によって無教会主義キリスト教からカトリックへ、その教義内容を理解する前に改宗している。この出来事によって田中は、普遍的な「神」への「信仰」をもってしても相容れない「他者」の存在を意識するようになるのである。彼等の「宗教」は、飽くまで自身の経験的で合理的な判断を限界まで重ねた地点にあらわれるものであった。田中、南原と安倍、天野の差は、「個人」の倫理的正当性の最終的な拠り所として、「神」を想定するか否かという差で

あり、論理の出発点に超越的存在である「神」を想定して「個人」を論じるわけではないのである。その為、彼等の「集団」に対する意識も、単に宗教的思想が背景にあるから、という前提で判断することはできない。付言すれば、天野は、超越的な裏付けのないままに「道徳」や「道理」という価値の存在があると「信仰」していたことを考えれば、立場としてむしろキリスト教を信奉していた田中と南原に近いと考えられる。

「個人」と「集団」とに対する意識の差からいえば、田中は、内村とそして南原との論争からうかがえるように、現実的な場において、それが超越者による普遍的価値を受け入れたもの同士であっても、相容れない状況があると知り、「集団」の価値を、時に「個人」より優先するようになる。「集団」の価値を賞揚する田中に見ることができるのは、「個人」という存在が共通認識を得ることは出来ない、という諦観である。この意味で親近性をもつのは、安倍の認識である。安倍は、「集団」だけではなく「個人」の価値自体を一時、懐疑的に見ていた時期があった。安倍は、「個人」に対しても「集団」の価値に対しても、超越的な価値によって思考を飛躍させることなく、自身の経験と合理的判断のなかで問い続けた人物であった。安倍は特定の「個人」のあり方や「集団」の同一性に対して全面的な否定をすることはしない。しかしそこには、「個人」の主観や「集団」の同一性への不信感が常にあり、現実の状態に対する諦観と理想との葛藤の中で、容易に同一性を得ることをしりぞけたのである。いいかえれば、自分とは完全に異なる「他者」の存在を常に意識していたといえる。

天野は、「個人」の価値が基本にありながら、「社会」や「国家」をも規定しうる「道理」や「道徳」的価値を人間の本来的なものとして論じた。このことは、天野の「道徳」的価値に適合するものであれば、ときに「国民実践要領」のように「国家」に規定された「道徳」的価値を「個人」に与えることを可能にしてしまう。「人間」の普遍的価値への確信を、そのまま現実の社会集団に投げかけることが、天野の「集団」へのアプローチの仕方である。この点は「神」の理想的価値によって「集団」へ接近した南原と同様である。天野と南原に共通することは「人間」への純粋な信頼であろう。それは、両者が身近な人間関係の内に、着実なコミュニケーションをとり続けることで獲得することができた特質である。この特質は、ある時は堅実に「個人」の価値を守る姿勢を作り出し、ある時は、「個人」の価値を危うくすることに鈍感な意識をも作り出すのである。

彼等は、自身の「個人」の価値を守り続けるだけの自己同一性を獲得し、そこから「集団」へのもどり方を模索した。彼等の「集団」へのもどり方は、時に互いの価値を尊重し合い、時に衝突している。しかしこれらの「集団」へのもどり方は、現在からみても安易な価値判断を下すことのできる類のものではない。「個人」の価値を最大限に理解する意識があるにも拘わらず、実際の問題として「集団」にもどろうとすると、時、「集団」と「個人」いずれに価値を置くのかは極めて困難な問題としてあることが理解できる。この意味で、彼等にみた「集団」へのもどり方は、現代においても問題としてあり続けている。(了)

論文審査結果の要旨

本論文は、「社会の発見」という論題が単行しやすい二〇世紀初頭の日本思想理解に対し、それを「個人主義」に立脚した上での、「集団」への自己帰属のさせ方の問題と捉えることで、従来「大正教養派」といった枠組みで一括評価されがちであった人々の知的活動に、新たな思想史的意義と立体的な理解の見取り図を提示している。

まず、序論では、「個人」の自己同一性獲得の問題が、日本においては二〇世紀初頭の「新しい世代」によって本格的に取り組まれたこと、かつそれが第二次大戦後の彼らの政治的活動にも反映していること、そこからこの問題が二〇世紀初頭にとどまらず、戦後日本を貫く問題の源流となっている可能性が論じられる。

続く本論は5章から構成されている。

序章では、二〇世紀初頭の旧制第一高等学校における「個人」は、「国家」「家」「神」といった、「個人」を超越する価値観によって規定されるものではなく、「人間」としての「個人」を——葛藤をともないつつも——そこに帰属させ得る、すなわち自己同一性の確立を担保する限りでの「集団」との相関関係の中に存在する点に特質をもつことが、具体的に論じられる。

第二章から第五章では、上記の問題関心にもとづき、安倍能成、天野貞祐、田中耕太郎、南原繁の思想的内実の特性が論じられる。彼らはともに学生時代、内村鑑三の思想的影響をくぐりながら、普遍的な存在としての「人間」のあり方を、「自己」と「他者」との関係の中から求めた。その意味で一九世紀までの思想とは質的に異なる、新たな知的営為の世界を切り開いた。同時に、その「他者」の差異性の捉え方に敏感であるか否かの違いによって、また自己同一性確立の両側面である「個人」か「集団」のどちらにより力点を置くかによって、多様な思想活動の個性を展開させている。各章の論述をとおして、以上の点が浮き彫りになるよう構成されている。このような二〇世紀以降の知的営為の特質と、その展開の多様性を捉えるための適確な視座を析出しえたところに、本論文の学術的価値の核心がある。

結論では、序論から第五章にいたる内容が簡潔に整理されている。

本論文は、この二〇世紀初頭の思想的特質がなぜ生じたのか、またそれとは異なる外の思想世界、信仰世界との関係はどうであるのか、「人間の発見」とでもいうべき当該時期の知的営為が、現在に至る日本の思想の流れとどう連続し、どう断絶しているのかといった問題の考察、また論証における堅実さ、叙述における明解さ等の点で、今後の研鑽の余地を残しているが、本論文の成果が、斯学の発展に寄与するところ大なるものであることは疑問の余地がない。よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。